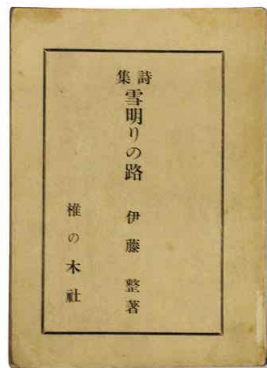


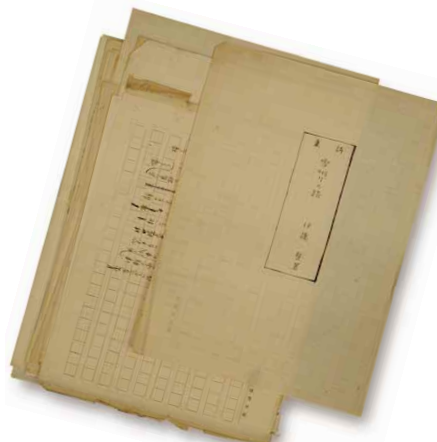
小樽高商



本学外国商業実践室（前方右端が整）



詩集 雪明りの路
(大正15年12月 椎の木社)



「雪明りの路」
「冬夜」草稿

伊藤 整と小樽高商 倉田 稔（本学教授）

伊藤整は、小樽中学を卒業して小樽高商に入学した。1922（大正11）年のことであった。校長は初代渡辺龍聖から、半年前に伴房次郎に代わったばかりであった。

整は「汽車通」をした。育った塩谷村から汽車で小樽へ通学した。だから学校の寮には入らなかった。通学列車は楽しかった。汽車で知り合った文学好きの友人たちとつきあった。彼らは同じ小樽中学だったから、自然に友達になった。北見恂吉（＝鈴木重道）が整を詩に引き入れた。整は、詩に興味をもち、詩人になろうとし、小説は低く見ていた(注)。しかしその小説に精魂傾けている1年上の上級生が小林多喜二であった。多喜二らは、学校の校友会誌を編集し、その部員であったが、整はそこへ近づけなかった。

もう一つ楽しいことは、汽車では女学生たちと会えることであった。といっても大正時代だからお喋りしたりはできなかった。彼女たちは小樽にある三つの女学校のいずれかに通っていた。彼はこの一人と、大正時代としては仰天する大胆不敵な恋愛・恋愛を繰り広げる。

田居尚（川崎尚）とその従弟の川崎昇も歌を作っていた。この二人が中心になって『青空』という雑誌を出していた。高商生だった整がその雑誌に引き入れられ、川崎昇と二人で高商石鹸を売って雑誌の資金を作ったこともある。

整はフランス語をとっていたので、高名な外語劇に2年生の時、出たことがある。ここで小林多喜二と話をするようになった。整は先輩の多喜二をいつも意識していた。

彼は、高商で人気のある大熊信行の講義を半年だけ聴いた。また多喜二と大熊の有名な授業風景を叙述している。多喜二と伊藤整の学んだ当時の小樽高商は、俳句、短歌、文芸、洋画、音楽、映画、新聞、カトリック研究など、学生の文化活動が一斉に花を開いた。そして後に「学園のルネッサンス」時代と呼ばれた。「文学的な、または社会思想的な一種の激しい雰囲気、その頃この学校にあった。この教師たちは、みな若く、当時の自由主義的な雰囲気の中で、一種の洗刺とした校風を作っていた。その教育は、全体として、商業実習的であるよりも、かなり社会思想研究的であり、かつ文学的と言っているほど語学偏重主義であった。」(整)

整は卒業して、小樽・長橋中学の英語教師になった。

(注) 曾根講演、二〇〇五年六月、小樽商大。



小樽市中学教員時代

伊藤整の、そして整についての書物

彼の作品は、『伊藤整全集』（新潮社）にほとんど収録されている。

小樽高商時代について、小説だからあてにはならないが、『若い詩人の肖像』がある。拙稿「伊藤 整『若い詩人の肖像』のフィクション性」（『人文研究』105 輯）でも分析した。詩集として『雪明りの路』がある。この2つは、商大生には読んでおいてほしい。

整はその後、小説『幽鬼の町』で、その後の小樽を書く。

全集未収録・作品未収録の彼の原稿「日露開

戦譚」が商大図書館にある。拙稿「伊藤整の直筆原稿「日露開戦譚」、小林多喜二の新記事、および大正時代末の小林多喜二の小説」（『人文研究』97 輯）でも再現しておいた。作品未収録原稿でもあった。

長編小説『得能五郎の生活と意見』あり、最晩年の作は『年々の花』。主要作品は『氾濫』。

整は、チャタレイ裁判で有名になった。昭和10年に新潮社から、ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳が伏せ字込みで、すでに出版されている。戦後、『女性に関する十二章』でも有名になった。『日本文壇史』が力作とされる。

論文「近代日本人発想の諸形式」が高名である。

伝記としては、曾根博義『伝記 伊藤整』六興出版、橘谷英昭『伊藤整』新潮社 がよい。小生の『小林多喜二伝』（論創社 2003 年）でも、整を詳しく書いておいた。

曾根博義『未刊行著作集 12 伊藤整』（白地社 1994 年）

小樽商大・高商史研究会『小樽高商の人々』（北海道大学出版会 2002 年）